

インターネット時代の仏教史学

——蔵俊編『注進法相宗章疏』の本文をめぐる——

ニールス・グェルベルク

はじめに

東亜仏教史の研究者にとって、インターネットが研究の基本的なツールの一つになって久しい。以前は価格のないし量的に簡単には手元に置けなかった大系シリーズ、例えば『大日本仏教全書』（百五十巻）、『日本大藏経』（四十八巻）、『大正新脩大藏経』（八十八巻）や『卍統藏経』（八十八巻）が、Google Booksなどで閲覧できるようになり、中でも『大正大藏経』と『卍統藏経』は、完全にOCR処理され、一字単位で検索できるようになった。この新しいツールによって様々な文献調査の効率が飛躍的によくなり、散逸した文献の逸文収集等の分野では、その成果が次々と上がっている。

一方、文献の電子化によって、紙媒体にあった情報が見失われつつある。特に電子版大藏経しか知らない若い世代に、紙上で底本や校訂に使用された本に関する情報や、底本との大きな相違が電子版に記されていないこと、電子版特有のテキスト標準化（検索や技術的な限界の都合による異体字の統一等）が明記されないままで行なわれていること等々が、十分に認識されていない場合がある。

また、メディアとしてのインターネットの歴史がまだ浅く、標準も技術的な進歩で次々と変わって行っている。最近大きく変わったことは、例えば文字エンコーディングで使用されているコード（Shift-JISからUnicodeへ）である。規格の変更に伴って、ネット上で提供されるテキストデータも常に

更新しなければならない。そのため、テキストデータが非常に流動的かつ不安定である。しかし、このメディアの流動的性格は、視点を変えればこのメディアの魅力でもあり、大きなチャンスであるともいえる。紙媒体で特定された本文には、本文研究の新たな展開を反映させることはできないが、ネット上のデータでは、新しいテキスト情報の追加がいつでも簡単にできる。

ここでは、奈良朝・平安朝の仏教研究者であれば誰でも手にするテキストを例に取り、紙上版でも解りづらいこのテキストの本文形成を振り返り、最後に、ネット上で公開されている伝本から得られる情報を従来使用されてきたテキストと対照させることによって、今後の研究の参考に供したい。

1 蔵俊編『注進法相宗章疏』について

『注進法相宗章疏』は、蔵俊によって安元二（1176）年十一月に編集された書籍目録であるが、その四年後の南都炎上の際に多くの書籍が失われた為、この蔵俊の目録が、かつて存在した書籍について知りうる重要な手がかりとなっている。流布本『注進法相宗章疏』は、342部の書名を、多くの場合巻数と著者名も挙げて、大乘経疏部の法華、般若、諸経釈、大乘律疏部、大乘論疏部、因明部、小乗論疏部、雑部と配列しており、これは、時代的に近い永超編『東域傳燈目録』（1094）と同じような明確な分類意識による配列である。題名の「注進」によって、勅命により注進せられたこと、いわゆる勅撰の目録であることは示されているが、不明な点が多い⁽¹⁾。平成二十三年九月に急死した新倉和文氏が氏の絶筆になった論文で、この目録の成立にまつわるエピソードを、東大寺図書館所蔵『法苑撰集抄』から紹介している。『法苑撰集抄』によると、蔵俊の長年の願いをかなえるために、平清盛が宋から直接法相宗章疏百巻を輸入し、蔵俊が当時住んでいた菩提院の経蔵に収めたという⁽²⁾。無論、これが事実かどうかはわからないが、もし大量の学書が宋から輸入されたのであれば、前例に従って、目録を作製し進呈したということも理解できる。

平安初期の延喜十四（914）年に、醍醐天皇の勅命を受けて東大寺の平祚が作ったのが『法相宗章疏』であり、蔵俊の『注進法相宗章疏』はそれから二百六十年後にできたものである。両目録の相違から、平安時代の法相宗教学の発展を読み取ろうとする研究も古くから行なわれてきた。両目録の最も大きな違いは、平祚の担当外だった因明部の有無（延喜十四年当時、因明の書籍は、『華嚴宗章疏』目録を手がけた円超の担当であった）であるが、書名の配列の違いや新収録の書名や事項があることの他に、平祚目録にあった書名でなくなっているものもあることも目立つ。因明部93部を除けば、蔵俊の『注進法相宗章疏』249部に対して、平祚の目録は169部である。円超の因明部53タイトルを加算した場合、延喜の目録類で見られる222部に対して、蔵俊には120部の増加があることになり、その中には宋からの輸入ではない日本述のものも含まれているが、量的には、ほぼ前記の清盛が輸入したという典籍に相当する。

2 近代の本文批判と本文形成

蔵俊の『注進法相宗章疏』の伝本に関して、『国書総目録』は「法相宗章疏目録」の名前の下に写本10種類、活字版3種類を挙げている。『国書総目録』も近年データベース化されていて、伝本情報の追加も行なわれているが、蔵俊の目録に関しては追加はされていない。仏教系三大学所蔵の写本は、書写時期が明らかにされていないが、近世のものと思われる。高野山の三宝院と持明院に伝わり現在は高野山大学に委託されている5本は、その中の3本に江戸中期の奥書が見えるし、残り2本も同じ時代のものと思われる。薬師寺の2本については詳細が判らないが、薬師寺は法相宗の伝統を守る寺院として古くから興福寺との縁が深く、地理的にも近いから、他の伝本より蔵俊の元撰を忠実に伝えていると期待してよかろう。

ここではこれらの写本ではなく、活字版3種類を取り上げ、それぞれの本文形成を検討してみたい。というのも、これらの活字版が、インターネット

版のもとになっているからである。

イ 続群書類聚所収の本文

『続群書類聚』巻八百三十四に収録された蔵俊の目録は、近代的な方法による本文翻刻としては不運なものだった。計画は幕末に遡るが、明治の半ばに完成した後、昭和二年八月の出版まで四十年以上もたち、その間に他の活字版（ロ）が先に世に出た。出版の遅れだけではなく、原稿を活字に起こす際のミスが甚だ多く、誤植・脱字のほか、無名の編集者が原稿を無断で別の目録（永超の『東域傳燈目録』）と校訂して、架空の本文を作り上げてしまった。『群書類聚』と同じく、『続群書類聚』は仏書に弱いことが以前から指摘されているが、蔵俊の目録に関しては特にひどくて、学術的な価値はゼロといえる。

幸いなことに、明治時代に完成された原稿の写しが、最近所有者である史料編纂所によりネット上で一般公開され、これによって、活字版で無意味になってしまっていた出版企画を再評価できるようになった。原稿は、糸原正供によって書写され、埴忠昭により校合されていた。年月が記載されていないが、史料編纂所によると、明治十二年から十八年（1879—1885）の間に『続群書類聚』全巻が謄写されているので、蔵俊の目録についてもその時期の後半に出来上がったと推測できる。

原稿の本文を細かく見ると、活字版では次の（ロ）で取り上げた版と異なっているところが、原稿では逆に（ロ）と同文の場合が多い。編集に当たってどのような伝本が使用されているかが明記されていないが、流布本と比較すると、並流本だったと言わざるを得ない。他の伝本と比較すると、特に後半に配列順番の細かい変更が目立つ。この配列変更が既に底本にあったか、あるいは『続群書類聚』の編集の際に行なわれたかは定かではないが、これを対比すると、それぞれの配列の特色が見えてくる。また因明部の一部に大きな配列の変更が見られるが、それは意図的なものではなく、伝本過程で起

こった錯簡によると思われる。というのは、ちょうど二丁分（それぞれ16行）の順番が入れ替えられているからで、このことから、現在知られている一頁10～11行の写本と異なる、一頁8行の伝本が過去に存在したことも判る。

ロ 大日本仏教全書所収の本文

大正二年一月出版の『大日本仏教全書』第一巻（仏教書籍目録第一）の中に、蔵俊目録の流布本ともいえる本が収録されている。このシリーズは、近代の出版物としては初めて蔵俊目録の全体を世に知らしめ、その後の研究の基礎となった。（イ）との違いがいくつかあるが、特に（イ）では伝わっていない、蔵俊の安元二年の奥書が目につく。

堀池春峰氏の解題によると、翻刻の底本になった伝本は、大正大学所蔵の写本である。底本の表記が安定していないようで、同じ著者名でも「靖邁/精邁」「璟/憬」など複数の表記が見られる。脱字も若干あるように思われる。翻刻の際、編集者が一箇所本文の訂正を考案している。更に、タイトルの注意書きに返り点をつけ、改頁の際に、著者名欄の「同上」を著者の具体名に改めている。また、翻刻の際にミスが三箇所できているが、これは堀池氏によって訂正されている（41a17同經私蹟→同經私頤、42c07同論記十卷清素→清素、44a13同鈔集二卷檀生修因→修圓）。

ハ 大正大蔵経第五十五卷所収の本文

昭和三年十一月に、蔵俊録の出版順としては三番目となる大正大蔵経本文（No. 2181）（以下「正蔵」と略記）が世に出た。既述のように、この本文は二度も完全にOCR処理され、日本のSATや台湾のCBETAによりインターネット上で公開されており、現在では最も使われている本文と思われる。

冒頭の本文注や『昭和法寶總目録』（656上）によると、編集者は『大日本仏教全書』（以下「大日全」と略記）を底本として使用し、このテキストを大谷大学所蔵の写本と校訂したという。

実際、正蔵と大日全の両テキストの間には、殆ど差がない。大日全で使用されていた通用文字が正字に直され（40b20蓮花→蓮華）⁽³⁾、また大日全が改頁の際に「同上」から著者の具体名に改めたところ（42b21太賢→同上、43c15智周→同上）を旧に戻している。しかし、大日全が提案している訂正（41a14遁經→遁倫）には従っておらず、言及もしていない。また、堀池氏が指摘している大日全の翻刻ミスは、二番目（清索→清素）以外はそのまま残っている。

明確な訂正作業は、二箇所にはしか見られない。そのうちの一箇所、41a09 同測→圓測は、明らかに大日全の誤植であり、校本がなくても訂正できる。

もう一箇所の訂正については、少々問題がある。41c28「同論疏三卷 法範撰」は、大日全の「玄範撰」を訂正したものだが、たとえば大谷大学本に「法範撰」があったとしても、簡単に訂正してよいところではない。というのも、既に平安初期に編纂された東大寺平祚の『法相宗章疏』に、同じ配列で同様の文献が並んでいて、

39b11辨中邊論疏三卷（基述）

39b12辨中邊論疏六卷（玄範述）

となっているし、蔵俊と時代的に近い永超編『東域傳燈目錄』でも、

57b10辨中邊論述記三卷（基撰）

57b11同論疏三卷（道證）

57b12同論疏三卷（玄範）

と、著者を「玄範」としている。大日全の本文に十分な裏づけがあるにも拘らず、根拠を示さないまま訂正するのは軽率であり、撤回されるべきである⁽⁴⁾。

3 新出伝本

以下イ、ロとして紹介する二種類の伝本は、厳密に言えば「新出」の資料ではない。一方は五十年前、他方は二十年前に、それぞれ購入または寄贈に

より研究機関に入ってきたものなのだが、その後、『注進法相宗章疏』の本文研究に活用された形跡が全く見当たらないので、「新出」とした次第である。活用されなかった原因の一つは、これらの伝本が、『国書総目録』にも、その改訂版ともいえる『日本古典総合目録データベース』にも収録されていないことにあると思われる。両方の伝本は、直接的ないし間接的に現在知られている他の伝本より二、三百年前の室町時代まで遡れるので、それだけでも注目に値する。暫く前から、両方の伝本を所有する研究機関によってインターネット上で写真として全文公開されているので、今後の研究にはもっと活用されるであろうと期待できる。

イ 史料編纂所本

請求番号0314—1。編纂所の所蔵史料目録データベースによると、16丁29cm、室町末期書写。この写本は、昭和三十四年一月に史料編纂所が購入した。外題は『法相宗章疏注進目録』、これは表紙裏で繰り返され、「興福寺藏俊贈僧正作」の注意書きが付けられている。内題は『注進 法相宗章疏』で、その下に、他の本に見られない著者名「権律師藏俊録」がある。1頁10～13行で、頁によって行数は異なり、安定した行数はない。

本文の系統としては、大日全と同じく流布本に所属するが、大乘論疏部から2点の書名が、因明部から1点の書名が脱落している。他方、大日全の脱字と思われるところ、例えば41b23「彌勒下生、同上」が、「彌勒下生成佛經疏、一卷、同上」と、完全な形で残っている。

史料編纂所本に最も特徴的なところは、他の流布本を量的に超える注意書きである。注意書きの一部は朱で書かれていて、その殆どが他本に見られないが、黒墨で書かれた注の中にも、史料編纂所本独自のものがある。例えば42b19「同論古迹、五卷、太賢」に、史料編纂所本では「義天目録爲十卷」と、異説を紹介している。今後、『注進法相宗章疏』の注意書きを評価する際には、史料編纂所本が重要になってくる。

史料編纂所本のもう一つの特徴は、他本に見られない部分けである。既述のように、『注進法相宗章疏』はいくつかの部に分けられるが、殆どの伝本がそれぞれの部を明記していない。しかし、史料編纂所本は、少なくとも因明部と雑部とを、行空けによって他の部と区別している。

ロ 萩野文庫本

請求番号イ04—3153/C33。萩野三七彦名誉教授のご遺族により、平成四年十二月に早稲田大学図書館に寄贈された。早稲田大学の『古典籍総合データベース』によると、一冊28cm。外題と内題は『注進法相宗章疏』、内題の頁に複数の朱印（「萩野藏」二種類、「早稲田文庫」、朱印の写し「和興福本院 / 納収慈心庫 / 敢不可出振 / 中宗釈空尊」）があり、興福寺蔵本の影写本のようなものである。1頁10行の安定した行数で書かれている。藏俊の本奥書の下に「(自安元二至永享七) 二百六十年」とあって、影写された原本が1435年にできたものであることが判る。

史料閲覧や書写の時期に関して記述はないが、二種類の「萩野藏」朱印から判断すると、萩野三七彦の父、萩野仲三が明治初期に収集した史料の一つであると推定できる⁽⁵⁾。

書名の有無や配列、著者名、注意書きなど、流布本と異なるところが相当あるが、原本の古さと出所だけから、原形に近い、というような判断は早計には下せない。影写本は恐らく忠実に原本を写しているが、41b12「般舟三昧経略記」を「般若三昧経略記」とするような誤写も見られる。また、原本に錯簡があって、修理の際に二丁が逆の順番になっている（『古典籍総合データベース』のHTML版でいうと、18右から19左に飛んで、20右からまた18左に戻らなければならない）。

4 四本対照注進法相宗章疏目録

以下においては、上述の伝本から四種類（2ハ、2イ、3イ、3ロ）の比

較を行なう。蔵俊目録の各部門をそれぞれの表にまとめたが、その際流布本（ここでは大正大蔵経を使用）の配列を基準にした。最後の二つの部門に跨る萩野文庫本の錯簡は元の順番に戻したが、その他の錯簡と思われるところはそのままとしておいた。各表では主に配列、著者名、巻数や題名の相違を示し、部門ごとにそれぞれの伝本のタイトルを1から数えた。

なお、各伝本に次の略表記を使用した。大正大蔵経所収の本＝正蔵、大日本仏教全書所収の本＝大日全、大谷大学所蔵の校訂本＝大谷本、史料編纂所糸原正供謄写『続群書類聚』＝続類聚、史料編纂所本＝纂本、萩野文庫本＝萩野本。

先ず、最初の三部門である大乘経疏部の法華、般若、諸経釈について、簡単に見てみよう。この三部門を一つの大きな部門と見ても差支えがないが、ここでは永超編『東域傳燈目録』の先例に従った。三つの部門に分けることは、萩野本の配列の違いを説明しにくくするが、後述のように、流布本には般若と諸経釈に跨る錯簡の可能性がある。大乘経を（1）法華、（2）般若、（3）諸経釈に配置することは、蔵俊独自の考え方に基づくようである。平祚の目録では、（1）般若、（2）涅槃、（3）解深密、（4）法華、（5）最勝王、（6）勝鬘など、法華を諸経釈の中に位置づけ、蔵俊に時代的に近い『東域傳燈目録』と法金剛院蔵目録⁽⁶⁾では、（1）華嚴、（2）般若と始まる。

表①【大乘経疏】【法華部】

大正大蔵経	続群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [40b20]	001	001	001
002 [40b21]	002	002	002
003 [40b22]	003	003	003
004 [40b23]	004	004	004
005 [40b24]	005	005	005
006 [40b25]	006	006	006
007 [40b26]	007	007	xxx
008 [40b27]	008	008	007
009 [40b28]	009	009	008

010 [40b29]	010	010	009
011 [40c01]	011	011	010
012 [40c02] 解節記, 三卷, 護命	013	012	011
013 [40c03] 解節記, 十卷, 護命	012	013	xx
014 [40c04] 略記, 三卷, 明一	014	014	012要略, 十卷, 明一
015 [40c05] 要略, 三卷, 徳一	015	015	013略記, 三卷, 徳一
016 [40c06]	016	016	014
xxx	xxx	xxx	015略頌, 一卷, 善珠
017 [40c07]	017	017	016
018 [40c08]	018	018	017
019 [40c09]	019	019	018
020 [40c10]	020	020	019
021 [40c11]	021	021	020
022 [40c12]	022	022	021
xxx	xxx	xxx	022略頌, 一卷, 眞興
xxx	xxx	xxx	023七喻法合頌, 一卷, 眞興
023 [40c13] 同上=仲算	023	023	024同=眞興
024 [40c14] 同上=仲算	024	024	025同=眞興
025 [40c15]	025	025	026

蔵俊の法華部に挙げられた題名の殆どは、『東域傳燈目録』にも見えるが、永超録とは異なり、平祚の目録とは同じく、法相宗の経疏に限られている。また、他の目録に見られない奥州徳一撰の著作2点が目に付く（『東域傳燈目録』と法金剛院蔵目録は、「法華經權文一卷」を得一撰として挙げているが、巻数も題名も蔵俊録と異なっている）。

四本の配列の違いについて述べれば、先ず、流布本で007智周撰とされている法華經決擇記（八巻）が、萩野本では見当たらない。『東域傳燈目録』には、同名同巻数の崇俊撰はあるが、智周撰はない。萩野本の方が正しいことになるが、訂正の為に二次的に消された可能性も考えられる。表には記していないが、011の題名は、正蔵を除いて諸本では「同經辨闇」となっている。続類聚の蔵俊録には順番変更がしばしば見られるが、012～015はその最初の例であり、しかも護命撰の著作の少ない巻数のものを後に回している。護命に同名の著作二種類があることは、既に『東域傳燈目録』（49b25四巻、49c15十巻）に見えるため、十巻本は萩野本の記入漏れと思われる（題名と

著者名はなくなっているが、巻数が次の明一作に混入されている)。流布本の014/015についても、萩野本では混乱が続いていて、明一撰と徳一撰の著作名が逆になっている（『東域傳燈目録』49c20に「同略記三卷（或云疏四卷）」が明一撰として出ている、「疏」一字は高山寺本にない）。016の善珠作の後に、萩野本では他本に見られないもう一つの善珠作（法華經略頌、一卷）を挙げています。ここでは同じ著者のものを並べているが、別の増加部分（022仲算撰法華經略頌一卷の後）では同名連想で眞興撰法華經略頌一卷を挙げ、眞興のもう一つの撰述書も加えている。この眞興著作の増加部分により、『東域傳燈目録』（49c22、50a17）で仲算撰になっている023/4番が、萩野本では眞興著作になっている。なお、『東域傳燈目録』の49c14「同經掌記十卷」は、蔵俊録のすべての伝本で「同經常記」となっている。

法華部に関していえば、萩野本には流布本を訂正できるところもあるが、脱落した部分と増加した部分もある。この増加部分の出所は不明であるが、最後の増加部分は明らかに蔵俊の手によるものではなく、後世のものである。

表②【般若部】

大正大蔵經	続群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [40c16]	001	001	001
002 [40c17]	002	002	002
003 [40c18]	003	003	003
004 [40c19]	004	004	004
005 [40c20]	005	005	005
006 [40c21]	006	006	006
007 [40c22]	007	007	007
008 [41a01]	008	008	008
009 [41a02]	009	009	009
010 [41a03]	010	010	010
011 [41a04]	011	011	011
012 [41a05]	012	012	012
013 [41a06]	013	013	013
014 [41a07]	014	014	014
015 [41a08] 略贊，一卷，同上=基	015	015	xx
016 [41a09] 經疏一卷 圓測	016	016	015略贊，一卷，圓測
017 [41a10]	017	017	016
018 [41a11]	018	018	017

019 [41a12]	019	019	018
020 [41a13]	020	020	019
021 [41a14] 遁經	021遁倫	021遁經	020道經
022 [41a15]	022	022	021
023 [41a16]	023	023	022
024 [41a17]	024	024	023
025 [41a18]	025	025	024
026 [41a19]	026	026	025
027 [41a20]	027	027	026
028 [41a21]	028	028	027
029 [41a22]	029	029	028
030 [41a23] 宣演, 三卷, 道胤	030	030	029演談, 三卷, 道胤
031 [41a24]	031	031	(*)

(*)「同經料簡記」は配列上萩野本では彌勒經を指すため、般若部ではなく、次の部門に入る。

般若部についても、藏俊独自の配列意識が見られる。この部門の配列は、平祚録では、(1) 金剛、(2) 仁王、(3) 理趣分、(4) 心經となり、『東域傳燈目錄』では(1) 小品、(2) 金剛、(3) 理趣分、(4) 大般若、(5) 仁王、(6) 心經となり、法金剛院藏目錄では(1) 大般若、(2) 理趣分、(3) 小品、(4) 金剛、(5) 仁王、(6) 心經となっているように、様々であるが、心經の經疏を最後に置くのは共通しており、金剛般若の經疏を前に置く点も同様である。他方、藏俊は、(1) 大般若、(2) 仁王、(3) 心經、(4) 理趣分、(5) 金剛と、心經と金剛般若の經疏について全く異なる位置づけをしている。藏俊録に挙げられた文献の大半は『東域傳燈目錄』にも見られるが、5点に関して先行目録との関連が未確認である。

四本における般若部内の配列については、三本は全く同じであるが、萩野本にはいくつかの違いがある。015/016は、法華部の012/013と同様なミスで、基撰の著作と巻数に次の文献の著者名を付けて、一点を飛ばしている。最後の文献(41a24同經料簡三卷、環興撰)は、相伝の過程で生じた錯簡により、次の部門の中から流布本の般若部に入り込んでいる(諸經釈部の解説を参照)。

著者名の相違については、021般若理趣分經疏一卷が、流布本で「遁經撰」

になっているが、大谷本と続類聚では「遁倫」となり、萩野本では「道經」となっている。『東域傳燈目錄』48a03の「同疏一卷（云記道證撰）」に相当するので、諸本の中では萩野本がそれに近い。萩野本の般若部の最後にあたる030、流布本で「同經宣演三卷、道胤集」は、『東域傳燈目錄』47c02にも取り上げられているが、「胤」という字に慣れていない書写者が混乱したと推測されるところであって、大谷本ではこの字を「胤」にしているし、萩野本ではくずし字が似ている「胤」にしている（「胤」を同音の当て字として使用している可能性もある）。ただ、題名を「演談」に変える理由は見当たらない。

表③【諸經釋部】

大正大蔵經	続群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [41a25]	001	001	018
002 [41a26]	002	002	019
003 [41a27]	003	003	020
004 [41a28] 經疏, 一卷, 靖邁	004遁倫	004靖邁	021靖邁
005 [41a29] 經疏, 一卷, 遁倫	005靖邁	005遁倫	022遁倫
006 [41b01]	006	006	023
007 [41b02]	007	007	024
008 [41b03]	008	008	025
009 [41b04]	009	009	026
010 [41b05]	010	010	027
011 [41b06]	011	011	028
012 [41b07]	012	012	029
013 [41b08]	013	013	030
014 [41b09]	014	014	031
015 [41b10]	015	015	001
016 [41b11]	016	016	002
017 [41b12] 般舟三昧	017	017	003般若三昧
018 [41b13]	018	018	004
019 [41b14]	019	019	005
020 [41b15]	020	020	006
021 [41b16] 淨土佛攝	021淨土佛攝	021淨土佛攝	007淨土佛勝
022 [41b17]	022	022	008
023 [41b18]	023	023	009
024 [41b19]	024	024	010
025 [41b20]	025	025	011

026 [41b21]	026	026	012
027 [41b22]	027	027	013
028 [41b23] 生	028生成佛經疏	028生成佛經疏	014生成佛經疏
029 [41b24]	029	029	015
030 [41b25]	030	030	016
(*)	(*)	(*)	017同經料簡, 三卷, 璟興
031 [41b26] 同經抄	031同經抄	031同經抄	(**) 032同經疏
032 [41b27]	032	032	033
033 [41b28]	033	033	034
034 [41b29]	034	034	035
035 [41c01] 觀普賢經	035觀普賢經	035觀普賢經	036觀音呪經
036 [41c02]	036	036	037
037 [41c03]	037	037	038
038 [41c04] 最勝王疏	038最勝王疏	038最勝王疏	039穴波王經疏
039 [41c05]	039	039	040
040 [41c06]	040	040	041
041 [41c07]	041	041	042
042 [41c08]	042	042	043
043 [41c09]	043	043	044

(*)「同經料簡(記)」は萩野本では彌勒經を指すが、他本では般若部の金剛般若經を指す。

(**)「同經疏」は萩野本では空罽索經を指す。

諸經釈部は、当然それぞれの目録で諸經の配列が異なっている。ここでは、蔵俊録の諸本の配列の違いだけを論ずるに留める。既述のように、萩野本の配列が元に近いものと思われ、逆に流布本の諸經釈部の最初の二丁は錯簡のため、本来弥勒經典の解釈を指した「同經料簡(記)三卷、璟興撰」が、道氤撰『金剛般若經宣演』の後に回ってしまっている。錯簡が起こった写本は、現存するものでは未確認の一頁8行の伝本だったことも判る(既述のように、続類聚因明部の大きな配列の変更も、同じような一頁8行の伝本から生じたと推測される)。萩野本の配列で二丁めの部分が流布本で最初に回り、そのため配列が孟蘭盆で始まっているが、元の配列を萩野本によって復元すると、(1)十輪、(2)菩薩藏、(3)般舟三昧、(4)無量壽、(5)阿彌陀、(6)稱讚淨土、(7)勝鬘、(8)維摩、(9)彌勒、(10)孟蘭盆、(11)藥師と、『東域傳燈目録』の寶積・大集に続く配列と全く同じである。萩野本

017が指す注釈書に当たるものとしては、複数ある環興撰述の弥勒経釈のいずれにも⁽⁷⁾その可能性がある。しかし、流布本が指す環興撰述金剛般若経釈は、どこにも見当たらない。また錯簡部分の続きを見ると、流布本の41b26「同経抄一卷、善珠」はその直前に出ている弥勒経釈を指すため、「三弥勒経抄一卷」となるはずだが、善珠には同名の著作がない。一方、萩野本の配列では「同経疏」は不空鞞索経を指し、同名の著作が『東域傳燈目錄』(52c20)にも確認できる。流布本の著者名も41b25「善珠撰」に続いているにも拘らず、「同上」とはされていないのが不自然である。

表記については、萩野本の003「般若三昧」、007「浄土佛勝」、036「観音呪経」は、この伝本によくあるケアレス・ミスと思われる。

表④【大乘律疏】

大正大蔵経	統群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [41c10]	001	001	001
002 [41c11]	002	002	002
003 [41c12] 太賢	003太賢	003文賢	003太賢
004 [41c13]	004	004	004
005 [41c14]	005	005	005

大乘律疏部には、平祚録の文献に和撰述2点を加えただけである。配列も本文も、纂本の誤写された著者名以外にない。

表⑤【大乘論疏】

大正大蔵経	統群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [41c15]	001	001	001
002 [41c16]	002	002	002
003 [41c17]	003	003	003
004 [41c18]	004	004	004
005 [41c19]	005	005	005
006 [41c20] 同論章, 五卷, 神廓	006	006	008
007 [41c21] 同論疏, 十一卷, 神廓	007	007	006
008 [41c22] 同論疏, 十卷, 神泰	008	008	007
009 [41c23]	009	009	009
010 [41c24]	010	010	010
011 [41c25]	011	011	011
012 [41c26]	012	012	012

013 [41c27]		013	013	013
014 [41c28]		014	014	014
015 [41c29]		015	015	015
016 [42a01]		016	016	016
017 [42a02]		017	017	017
018 [42a03]		018	018	018
019 [42a04]		019	019	019
020 [42a05]		020	020	020
021 [42a06]		021	021	021
022 [42a07]		022	022	022
023 [42a08] 雑集論		023新集論	023雑集論	023新集論
024 [42a09]		024	024	024
025 [42a10] 論疏, 十六卷, 靈攜		025靈偈	025靈偈	026靈偈
026 [42a11] 論疏, 十二卷, 勝莊		026勝莊	026勝庄	025勝庄
027 [42a12]		027	027	027
028 [42a13]		028	028	028
029 [42a14]		029	029	029
030 [42a15]		030	030	030
031 [42a16]		031	031	031
032 [42a17]		032	032	032
033 [42a18]		033	033	033
034 [42a19]		034	034	034
035 [42a20]		035	035	035
036 [42a21]		036	036	036
037 [42a22]		037	037	037
038 [42a23]		038	038	038
039 [42a24]		039	039	039
040 [42a25]		040	040	040
041 [42a26]		041	041	041
042 [42a27]		042	042	042
043 [42a28]		043	043	043
044 [42a29]		044	044	044
045 [42b01]		045	045	045
046 [42b02]		046	046	046
047 [42b03]		047	047	047
048 [42b04]		048	048	048
049 [42b05]		049	049	049
050 [42b06]		050	050	050
051 [42b07]		051	051	051
052 [42b08] 應抄, 五卷		053	052	052
053 [42b09] 光抄, 八卷		052	053	053
054 [42b10]		054	054	054
055 [42b11]		055	055	055

056 [42b12]	疏, 十卷, 圓測	056	xxx	056
057 [42b13]	道, □卷, 極太	057	xxx	057導
058 [42b14]	疏, 四卷, 惠觀	058	056	059
059 [42b15]	文義記, 十卷, 神昉	059	057	058
060 [42b16]		060	058	060
061 [42b17]		061	059	061
062 [42b18]	論貶量抄, 十卷, 極太	xxx	060	062
063 [42b19]		062	061	063
064 [42b20]		063	062	064
065 [42b21]		064	063	065
066 [42b22]		065	064	066
067 [42b23]		066	065	067
068 [42b24]		067	066	068
069 [42b25]		068	067	069
070 [42b26]		069	068	070
071 [42b27]		070	069	071
072 [42b28]		071	070	072
073 [42b29]		072	071	073
074 [42c01]	太抄, 十八卷, 靈泰	074	072	074
075 [42c02]	義演, 十三卷, 如理	073	073	075義演微抄, 五卷, 如理
076 [42c03]	談微抄, 五卷, 如理	xxx	074	076
077 [42c04]		074	075	077
078 [42c05]		075	076	078
079 [42c06]		076	077	079
080 [42c07]		077	078	080
081 [42c08]		078	079	081
082 [42c09]		079	080	082
083 [42c10]		080	081	083
084 [42c11]		081	082	084
085 [42c12]		082	083	085
086 [42c13]		083	084	086
087 [42c14]		084	085	087
088 [42c15]		085	086	088
089 [42c16]		086	087	089
090 [42c17]	開題, 一卷, 嘉道訪	087開題, 一卷, x	088	090嘉道訪
091 [42c18]	義精, 一卷, 行賀	089	089	091
092 [42c19]	序釋, 一卷, 善珠	088序釋, 嘉道訪	090	092
093 [42c20]		090	091	093
094 [42c21]		091	092	094
095 [42c22]	義暉, 一卷, 行賀	093	093	095
096 [43a01]	記, 二卷, 憬興	092	094	096
097 [43a02]		094	095	097
098 [43a03]		095	096	098

099 [43a04]	096	097	099
100 [43a05]	097	098	100
101 [43a06]	098	099	101
102 [43a07]	099	100	102
103 [43a08]	100	101	103
104 [43a09] 同記, 二卷	102	102	104
105 [43a10] 同記, 四卷	101	103	105
106 [43a11]	103	104	106
107 [43a12] 要節, 二卷	105	105	107
108 [43a13] 記, 二卷, 義斌	104	106	108
109 [43a14] 抄記, 四卷, 圓證	107圓證	107圓證	109同證 (=道證?)
110 [43a15] 要決, 八卷, 常騰	106	108	110
111 [43a16]	108	109	111
112 [43a17]	109	110	112
113 [43a18]	110	111	113
114 [43a19]	111	112	114
115 [43a20]	112	113	115
116 [43a21] 抄, 四卷, 信叔	114	114	116
117 [43a22] 演秘釋, 五卷, 如理	113	115	117

大乘論疏部は117部で蔵俊録の中心となっており、その大半を『成唯識論』(70)が占める。平祚録の20部の頃に比べて、『成唯識論』の研究がいかに盛んになったかが伺えるが、当時の目録の中(『東域傳燈目録』75部、法金剛院蔵目録91部)では際立って多いわけではない。

その他の論釈について平祚録とだけ比較してみると、(1)平祚録と量的に変わらないもの(仏地、百法、顕揚、甘唯識、掌珍、仏性)、(2)平祚録より少なくなったもの(撰大乘、弁中辺、觀所縁々)、(3)平祚録より若干増えているもの(大莊嚴、雜集、広百、瑜伽)がある。要するに、『成唯識論』の論釈以外は平祚録と殆ど変わらないことが、蔵俊録の特色ともいえる。これに対して、当時の他の目録では大きな増加が見られる論釈もある、例えば『瑜伽論』(平7俊9東24法46)、『百法論』(平5俊5東19法17)、『雜集論』(平3俊4東11法15)、『弁中辺論』(平4俊3東8法8)などがそうである。

蔵俊録の伝本における論疏部の配列に関しては、『撰大乘論』と『雜集論』

のそれぞれ四種の論釈の配列は、萩野本と流布本で若干異なっているが、元の順番を論ずるには資料が少なすぎる。かろうじていえることは、『撰大乗論』の萩野本の配列は平祚録と同じということ、『雑集論』の平祚録にない勝莊釈を流布本と同様に後に挙げる前例は、『東域傳燈目録』にあるということである。

ここでは、蔵俊録論疏部の核心部分である『成唯識論』釈の配列を詳しくみてみよう。この成唯識論釈部が、配列順番に最も相違が出ているし、書名の脱落もしくは省略も纂本（2部）と続類聚（4部）に見られるのである。まず、成唯識論釈部内の配列を見ると、全体的に殆ど『東域傳燈目録』と同じである。全く同順の配列は九つのブロックにまとまっており（『東域傳燈目録』の行数で言うと、（1）57c17～57c20、（2）57c25～58a03、（3）58a12～58a19、（4）58a22～58b03、（5）58b08～58b10、（6）58b12～58b16、（7）58b17～58b18、（8）58b20～58b21、（9）58b26～58c07）、それぞれのブロックの間で挙げられている文献も、両方の目録に見られる。大正大蔵経第五十五卷所収の『東域傳燈目録』を基準にすると、『東域傳燈目録』には蔵俊録に見られない文献7点⁽⁸⁾があって、蔵俊録にも『東域傳燈目録』にない文献が2点⁽⁹⁾あるが、『東域傳燈目録』の伝本の中で最も古い高山寺本には、蔵俊録のこの文献2点が見られるのである。即ち、蔵俊録の成唯識論釈文献のすべてについて、既に十一世紀末に、学問上それらの重要性や順序に関して同意があったことが判る。ブロック間の配列は、（1）と（2）との間の『東域傳燈目録』abcdが蔵俊録ではcdba（続類聚にはdcba）に、（2）と（3）との間の『東域傳燈目録』abcxdexfが蔵俊録ではcbadfeに、（4）と（5）との間の『東域傳燈目録』abcxが蔵俊録ではbacに、（8）と（9）との間の『東域傳燈目録』abcdが蔵俊録ではbdcaxになっている。この配列の違い、例えば（2）と（3）との間がabcなのか、それともcbaなのかという順番の違いは、作者欄の「同上」の解釈を変える。大正大蔵経『東域傳燈目録』のabの「同上」は、58a03の「極太撰」を指してい

るが、蔵俊録ではc、即ち42b19「同論古跡五卷、太賢」の後なので、三部とも太賢作となっている。高山寺本『東域傳燈目録』では配列はacbになっていて、aには作者欄に「賢」と見える字が、虫食いの損傷にも拘らず読み取れる。ということは、高山寺本は蔵俊録と同じくabcを極太撰ではなく、太賢撰としているということである。このように高山寺本の読み方を裏付ける資料として、蔵俊録は役立つが、役立つことは他にもある。二つの例を挙げておこう。

まず、一つめの例としては、ブロック（5）58b10「同序釋一卷」を護命撰とすることには問題があるのは、既に井上氏が指摘したとおり⁽¹⁰⁾であるが、高山寺本では、58b11の後に、大正大藏経本にない「同序釋一卷（護命）」が58b10と並んでいる（四十八オ）。もし蔵俊録のように58b10の作者が善珠であれば、同じ題名同じ巻数のせいで起こりやすい誤写により、高山寺本では両方とも護命撰となったと推測される。

もう一つの例としては、蔵俊録のブロック（9）の直前に、大正大藏経『東域傳燈目録』に見られない43a12「同要節二卷」があり、43a13「同記二卷、義賦」と続く。高山寺本（四十八ウ）には両方の文献が逆の順番で出てきて、「同記二卷（義賦）同要節二卷」となっている。大正大藏経本の58b26「同要節二卷（義賦）」は、両方を混同している。

論疏部の配列に関して最後に付け加えておけば、萩野本と流布本蔵俊録が全く同じ上に、『東域傳燈目録』の配列とも概ね同じといえるので、纂本と続類聚に見られる順番の変化や文献の脱落は二次的なものと考えればよい。萩野本の075「義演微妙抄五卷、如理」は同じ本で、この箇所まで二度起っている文献脱落（法華部と般若部の解説参照）がまた起こる前兆、即ち次の文献との混同であるが、前の二回と異なり、その次の文献を残している。

表⑥【因明部】

大正大藏経	続群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [43a23]	001	001	001

002 [43a24]	002	002	002
003 [43a25]	003	003	003
004 [43a26]	004	004	004
005 [43a27]	005	005	005
006 [43a28]	006	006	006
007 [43a29]	007	007	007
008 [43b01] 述記, 二卷, 騰庄	008勝庄	008勝庄	008勝庄
009 [43b02]	009	009	009
010 [43b03] 抄, 二卷, 道證	012	010	010
011 [43b04] 疏, 六卷, 定寶	010	011	011
012 [43b05] 疏, 三卷, 文備	011	012	012
013 [43b06]	013	013	013
014 [43b07]	014	014	014
015 [43b08] 註, 四卷, 沙門崇	016	015	015
016 [43b09] 同論抄, 二卷, 道獻	015道論抄, 一卷, 016道論抄, 一卷, 016道論抄, 二卷,		
017 [43b10]	017	017	017
018 [43b11]	018	018	018
019 [43b12]	019	019	019
020 [43b13] 因明入正理論疏	020因明入正	020同明入正	020因明入正
021 [43b14] 疏, 一卷, 精邁	023精邁	021精邁	021精邁
022 [43b15] 疏, 三卷, 壁法師	021	022	022
023 [43b16] 疏, 三卷, 大莊嚴寺文軌	022	023	023
024 [43b17]	024	024	024
025 [43b18]	025	025	025
026 [43b19]	026	026	026
027 [43b20]	027	027	027
028 [43b21]	028	028	028
029 [43b22]	029	029	029
030 [43b23]	030	030	030
031 [43b24]	031	031	031
032 [43b25]	032	032	032
033 [43b26]	033	033	033
034 [43b27]	034	034	034
035 [43b28] 論略纂, 四卷	035	035論略纂	035論略贊
036 [43c01] 論纂要, 一卷, 惠沼	036	036	037
037 [43c02] 論義斷, 一卷, 惠沼	037	037	036
038 [43c03] 論要略, 一卷	038	038	039
039 [43c04] 論義心, 一卷, 道獻	039	039	038
040 [43c05]	040	040	040
041 [43c06]	041	041	041
042 [43c07]	042	042	042
043 [43c08] 柔抄, 一卷, 同悟	043同悟	043同悟	043圓悟
044 [43c09]	044	044	044

045 [43c10]	045	045	045
xxx	046	xxx	046同論義翼, 三卷
046 [43c11] [功+言=] 辯空	xxx	046辯空	047辯空
047 [43c12]	047	047	048
048 [43c13]	048	048	049
049 [43c14]	049	049	050
050 [43c15] 後記, 三卷, 智周	050	050	052
051 [43c16] 略記, 一卷, 智周	051	051	051
052 [43c17] [六+兄] 州	052充州	052充州	053充州
053 [43c18]	053	053	054
054 [43c19]	054	054	055
055 [43c20] 疏記, 九卷, 平備	055二十備	055平備	056平備
056 [43c21] 疏記, 三卷, 法隆寺孝仁	072	056	057
057 [43c22]	073	057	058
058 [43c23] 本名俊清	074本名俊清	058本名俊清	059本名俊備
059 [43c24]	075	059	060
060 [43c25]	076	060	061
061 [43c26]	077	061	062
062 [43c27]	078	062	063
063 [43c28]	079	063	064
064 [43c29]	080	064	065
065 [44a01]	081	065	066
066 [44a02] 義, 一卷, 法隆寺道詮	082二卷, x	066一卷, 道詮	067一卷, 道詮
067 [44a03] 丈軌疏記, 三卷, 慶俊	083丈軌疏記	067丈軌疏記	068丈軌疏記
068 [44a04]	084	068	069
069 [44a05]	085	069	070
070 [44a06]	086	070	071
071 [44a07]	087	071	072
072 [44a08] 記, 一卷, 俊清	056	072	073
073 [44a09]	057	073	074
074 [44a10]	058	074	075
075 [44a11]	059	075	076
076 [44a12] 集記, 三卷	060	076三卷, 檀生修圓	077集記, 三卷
077 [44a13] 二卷, 檀生修因	061二卷, 檀生修因xxx		079檀生修圓
078 [44a14] 祕心, 一卷, 檀生修因	062檀生修因	077檀生修圓	078檀生修圓
079 [44a15]	063	078	080
080 [44a16]	064	079	081
081 [44a17]	065	080	082
082 [44a18]	066	081	083
083 [44a19]	067	082	084
084 [44a20] 集記, 一卷, 願建	068	083	086
085 [44a21] 記, 一卷, 釋隣	069	084	085
086 [44a22] 同明蓋	070因明蓋	085因明蓋	087因明蓋

087 [44a23] 因明義	071同明義	086因明義	088因明義
088 [44a24]	088	087	089
089 [44a25] 答量撮, 一卷	089答量撮	088答量撮	090三量撮
090 [44a26]	090	089	091
091 [44a27] 比量集記, 一卷, 願建	092北量	091比量集記	092
092 [44a28] 比量遣偽興, 一卷, 行賀	091北量遣疑興	090比量遣偽興	093
093 [44a29] 勝軍比量, 一卷, 願建	093北量	092勝軍比量	094

因明部は93部（萩野本94部）で、蔵俊録の中で論疏部に次ぐ量であり、延喜期の『華嚴宗章疏』因明部（53部）の倍近くに増えたことになる。因明学の中興の祖と言われた蔵俊にあっては当然のことともいえるが、当時の目録類の中で特に多い訳でもない。『東域傳燈目録』の因明部には100部、法金剛院蔵目録の因明部には105部も記録されている。しかも、蔵俊録因明部の93部は、前記の成唯識論釈部と同様、ほぼ同じ配列で、すべて『東域傳燈目録』の因明部にも入っている。両目録における同配列から唯一はみ出ている蔵俊録43b20「同〔=因明入正理〕論抄一卷、順憬」と『東域傳燈目録』60c16「因明論抄一卷（須憬）」⁽¹¹⁾は、『東域傳燈目録』の書写過程の早い時期（高山寺本成立の鎌倉初期以前）に蔵俊録が参照されたことを証明しており、蔵俊録因明部唯一の独自文献が、「因明」と始まる書題の最後として『東域傳燈目録』のリストに付け加えられているのである。

因明部に関する蔵俊録と『東域傳燈目録』の配列を比較すると、全く同順の配列は十二のブロックにまとまっており、（1）59c12～59c14、（2）59c18～59c23、（3）60a02～60a07、（4）60a09～60a10、（5）60a12～60a19、（6）60a26～60b09、（7）60b12～60b15、（8）60b23～60c01、（9）60c06～60c08、（10）60c14～60c15、（11）60c17～60c18、（12）60c22～60c24となっている。上記の蔵俊録43b20はブロック（3）と（4）との間にあり、『東域傳燈目録』60c16はブロック（10）と（11）との間にある。各ブロックの前の部分ないしブロックとブロックの間の部分の配列については、（1）の前の『東域傳燈目録』abxが蔵俊録でbaに、（1）と（2）との間の

『東域傳燈目錄』 abc が藏俊録で bca に、(2) と (3) との間の『東域傳燈目錄』 abc/de/fx が藏俊録で bca/ed/f に、(5) と (6) との間の『東域傳燈目錄』 abcdef が藏俊録で bacdfe に、(6) と (7) との間の『東域傳燈目錄』 ab が藏俊録で ba に、(7) と (8) との間の『東域傳燈目錄』 abcdefg が藏俊録で bcgefda に、(8) と (9) との間の『東域傳燈目錄』 abcx が藏俊録で bac に、(9) と (10) との間の『東域傳燈目錄』 abcde が藏俊録で cabed に、(11) と (12) との間の『東域傳燈目錄』 xab が藏俊録で ba になっている。ただ、こういう配列の違いは『東域傳燈目錄』諸本の間にも見られる。例えば(7)と(8)との間の『東域傳燈目錄』 abcdefg が、高山寺本では xbcfdeg となっている等。

ここでは藏俊録の諸本の違いを見てみよう。萩野本は他本より一部多くなっているが、046[43c11]「同論義翼三卷、碧空」の前に、作者不明の同名同巻数（「同論義翼三卷」）を挙げている。作者名の見慣れない異体字に敢えてルビを付けているので、書写の際の不注意で二重に書いたとも思われぬが、かといって、同名の著作が二種類あったことを示す資料も他に見当たらない。

最後の三部の配列の違いは、統類聚と纂本に共通しているが、ただこれは同著者の作品に並べ替えただけである。既述のように、統類聚で、流布本の072～087の16行（一頁8行の一丁分）が前の丁（056～071の一頁8行の一丁）と入れ替わり、順番は乱れているが、これは流布本の諸経釈部で見られた錯簡とよく似ている。流布本には因明部の錯簡が見られないから、流布本が分かれた後で、一頁8行の親本に二度目の錯簡が生じたのではないかと思われる。

室生寺の創立者の一人で、檀生禪師という綽名で知られている修圓の「檀」の字は、書写の際多くの人を惑わせたようである。統類聚と纂本には、木偏の代わりに手偏が書かれ、この実在しない〔手+聖〕の異体字を、萩野本は更に別の手偏の字と置き換えている⁽¹²⁾。更に、纂本は檀生修圓の最初の著作を落とし、著者名を誤って前の作品に付けている。なお、表では修圓

の名前を正しく伝える伝本として纂本と萩野本だけを挙げたが、既述のように、堀池氏の指摘どおり、正蔵の本文もその元になった大日全と同様、訂正されなければならない。

他の相違を見ると、(1) 043の作者を「同悟」ではなく、「圓悟」とするのは萩野本だけだが、それは正しいと思われる。(2) 089の題名を「三量撮」とするのも萩野本だけだが、既に永超録と『東域傳燈目録』にこの名で見える。(3) 066は、諸本共通して「法隆寺道詮」を著者としているが、大正大藏経『東域傳燈目録』60b19は、それを「法隆寺明詮撰」としている。既述のように、高山寺本は若干別の配列になっているが、大正大藏経本60b20「明詮」作を先に挙げながら、『四種相違義一卷』については「法隆寺詮撰」としている。もし「法隆寺詮」と「明詮」が同じ人物なら、60b20の著者は「同上」と記すべきなのに、そうになっていないということは、別人を意味している。そもそも明詮は法隆寺の僧侶ではなく、元興寺に住んでいたから、「元興寺明詮」が正しい呼び名のはずである。ちなみに、蔵俊やその弟子貞慶の著作で明詮と道詮の説がしばしば引用されている中に、貞慶の『明本抄』⁽¹³⁾に「四種相違私記(道詮)云」とあるように、蔵俊録と類似する形で挙げられている。こういう点からも、『東域傳燈目録』諸本の中で孤立している高山寺本の異文に関して、蔵俊録が一つの裏づけとなることが判るのである。

表⑦【小乗論疏】

大正大藏経	統群書類聚	史料編纂所本	萩野文庫本
001 [44b01]	001	001	001
002 [44b02]	002	002	002
003 [44b03]	003	003	003
004 [44b04] 論記, 十五卷,	004論論,	004論論,	004
005 [44b05]	005	005	005
006 [44b06] 頌疏記, 五卷, 遁隣	xxx	006遁隣	006遁隣
007 [44b07]	006	007	007
008 [44b08]	007	008	008

小乗論疏部については、これを因明部の後に入れている点は、『東域傳燈目録』と共通するが、『東域傳燈目録』の39部から順番を維持したまま8部を選んで並べただけである。004の俱舎論疏光記に関して、続類聚と纂本には同じ誤写が見られる。また、続類聚では、唐遁麟撰の『俱舎論頌疏記』が省略されている。

表⑧【雑部】

大正大蔵経	続群書類聚	史料編纂所本	荻野文庫本
001 [44b09]	001	001	002
002 [44b10]	002	002	001
003 [44b11]	003	003	003
004 [44b12]	004	004	004
005 [44b13]	005	005	005
006 [44b14]	006	006	006
007 [44b15]	007	007	007
008 [44b16] 林章, 十二卷	008林章十三卷	008	008
009 [44b17]	009	009	009
010 [44b18]	010	010	010
011 [44b19]	011	011	011
012 [44b20]	012	012	012
013 [44b21]	013	013	013
014 [44b22]	014	014	014
015 [44b23]	015	015	015
016 [44b24] 姓差別集, 三卷, x	016三卷, 神昉	016三卷, 神昉	016姓差別集, 三卷, 神昉
017 [44b25] 菩提心集, 三卷	017三卷, 惠沼	017三卷, 惠沼	018三卷, 惠沼
018 [44b26] 義章, 五卷	018五卷, 遁倫	018五卷, 遁倫	017五卷, 遁倫
019 [44b27] 要決, 一卷	019一卷, 大乘基	019一卷, 大乘基	019一卷, 大乘基
020 [44b28]	020	020	020
021 [44b29] 研神章, 五卷	021五卷	021五卷, 護命	021五卷, 護命
022 [44c01] 音義, 二十五卷	022二十五卷	022廿五卷, 玄應	022廿五卷, 玄慈
023 [44c02] (注あり)	023 (注あり)	023 (注あり)	023 (注なし)
024 [44c03] 慈恩三藏傳, 十卷	xxx	024	024

雑部24部については、その内の6部は既に平祚録にも収録されている。また、配列に若干相違はあるが、殆ど全部の題が『東域傳燈目録』の「雑述録」部にも見える。大日全の底本には神昉以下の著者名が脱落しているが、大谷本を初めとする他の諸本には著者名が存在している(022一切經音義の

著者を「玄慈」にするのは、萩野本の誤写と思われる。

蔵俊録諸本における雑部の配列の違いについては、萩野本の二箇所、他の三本との違いが見られるだけである。流布本では、初めに『大乘法苑林章』の名を挙げ、次いで『大乘法苑林章』の内容の一部の名『二十七賢聖章』を挙げるという順になっているのに対し、萩野本では、その逆の順で名が挙げられている。いずれの順にも先例があるので、どちらか一方の順だけが正しいとはいえない。『東域傳燈目録』には、『二十七賢聖章』しか挙げられていないため、配列の参考資料にはならない。法金剛院蔵目録は『大乘法苑林章』で始まってはいるが、『二十七賢聖章』の方は収録されていない。

配列違いのもう一箇所は017/018で、流布本と萩野本ではこの順番が逆になっているが、『東域傳燈目録』の配列では遁倫(63a26)が先に、惠沼(63b04)が後に出ているので、萩野本と同じである。なお、続類聚の024に対する態度は、意図的な省略ではなく、続きの蔵俊奥書も欠けていることからしても、単なる欠陥(落丁)と思われる。

萩野本にない『大唐西域記』の注意書きは、室町後期のものと思われる。他の注意書きにも蔵俊まで遡る注は殆どないようだが、これも同様である。

5 まとめ

蔵俊録諸本の違いで分かったことをまとめると、(1) 従来使用されてきた流布本には大きな錯簡や注の書き加えなどが見られることから、流布本は室町後期以前には遡れないと考えられる。(2) 古態本の配列などが残る唯一の伝本といえる萩野本も、簡単に直せる錯簡もあるが、脱落や誤写が甚だ多いため、萩野本だけでは古態本を復元できない。(3) 成立年代で先行している『東域傳燈目録』に、高山寺本以前の早い段階で、蔵俊録から文献が追加された。

この結果から今後の研究課題も見えてくる。まず、蔵俊録に関して古態本の伝本探しが急務である。現在知られている伝本の中で、高野山の5本と葉

師寺の2本がまだ本文研究に活かされていないが、古態本かどうかの決め手となる諸経釈部の冒頭の錯簡から、簡単に分類できるはずである。今回の分析では主に著者名と配列の相違を論じたが、諸本の中の注意書きの違いも詳細に検討する必要がある。また、蔵俊録に見られる文献と蔵俊の著作を再検討することも必要となる。最近の蔵俊研究で次々と蔵俊作の新発見があり、以前より比較できるテキストが多くなってきた。一例を挙げると、近く船田淳一氏により翻刻・紹介される蔵俊作『仏性論』（仮題、治承五年に貞慶ら弟子達に書写された五卷著書の残巻、蔵俊作『唯量抄』と同じ傾向の源信批判を展開）がある。この著作に、蔵俊録に収録した文献の中、例えば徳一の著作（『中邊義鏡章』、『法相了義燈』）、神昉撰『種姓差別集』、靈雋撰『雜集論疏』からの引用が見られる。

今回の研究とその成果は、インターネット上で公開されている資料によって可能になった。その点ではまさに「インターネット時代の仏教史学」ともいえる。しかし、従来のインターネット検索機能では、史料編纂所本も萩野本も検索できなかった（執筆者は、たまたま両研究機関内の資料を調べた際に、内部検索機能で法相宗関連のものから割り出した）。これはインターネット構造内の目下の問題⁽¹⁾で、自主的に解決される見通しはないけれども、公開中のインターネット資料は一つのユニオン・カタログにまとめられるのが望ましい。国の研究機構が既に運営している『日本古典総合目録データベース』に項目を一つ増やしさえすれば、この問題が効率よく解決できるはずである。

※萩野文庫に関しては、早稲田大学図書館特別資料室の方々に様々な助言を戴きました。厚く御礼申し上げます。

(1) だれが勅命を出したかについても諸説がある。『仏書解説大辞典』は、ただ「院宣に応じて」編集されたとして、明言を避けているが、一部の研究者の間で

は高倉帝の勅命とされている。それに対して、『大蔵経全解説大辞典』では鎌田茂雄氏が、「白河法王の院宣に応じて作製」されたとしているが、これは「後白河法王」のミスプリントであろうと思われる。

- (2) 新倉和文2010年、127—128頁。新倉氏も、後白河の院宣に応じて目録が作製されたと考えていた。
- (3) CBETAの本文は更に41c12、42b19、43b24迹→跡、42a10携→攜、〔43c11功+言→辯〕、44a21隣→鄰と、俗字を改めている。
- (4) 「法範撰」が意図的な訂正ではなく、単なるケアレス・ミスである可能性もあるが、その場合も改められるべきである。
- (5) 萩野文庫に、明治五年の東大寺調査の際に作製された『東大寺宝物文書目録』があり、そこに蔵俊目録と同じ「萩野藏」という朱印の一種が見られる。同文庫には、明治二十一、二年に小杉楢氏によって行なわれた関西寺院の調査の目録（『関西地方古書画古器物縦覧調査記録』）もあるが、興福寺に関する調査記録の中に、蔵俊録に関する記事は見当たらない。
- (6) 『東域傳燈目録』は、大正大蔵経55巻や高山寺資料叢書第十九冊に、法金剛院蔵目録（『大小乗經律論疏記目録』）は、牧田諦亮・落合俊典編『中國・日本經典章疏目録』に収録されている。なお、『東域傳燈目録』の配列については、末木文美士氏による考察がある。
- (7) 例えば『東域傳燈目録』の52a17同經述贊三卷、もしくは52a23同經註三卷。
- (8) 文献7点は58a07、58a10、58a20、58a21、58b07、58b11と58b19である。
- (9) 文献2点は43a03と43a12である。
- (10) 井上光貞1986、247参照。
- (11) 『東域傳燈目録』の「須憬」と「順憬」が同じ人物を指していることは、既に『韓国仏書解題辞典』47で指摘されている。高山寺本『東域傳燈目録』（五十五オ）も「順憬」となっている。
- (12) 法金剛院蔵目録682/683は、因明部077/078を「室生僧都」作とし、「檀」の字の使用を避けている。
- (13) 大正大蔵経69、498上。
- (14) 周知のように、現在インターネット上の莫大な情報は、検索事業を独占化した企業が管理しているが、二、三年前から検索結果の表示の量的制限や内容的なフィルタリングが、多くの利用者が気づかないうちに始められている。

参考文献

- 井上光貞、「東域伝燈目録より見たる奈良時代僧侶の学問」、『日本古代思想史の研究』、井上光貞著作集 第二巻、東京：岩波書店 1986年、227—266頁。

- 上島享、「中世仏教と目録」、『第四回国際研究集会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』』、2008年、55—57頁。
- 落合俊典、「興福寺と法金剛院蔵の章疏目録」、『第四回国際研究集会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』』、2008年、16—23頁。
- 小野玄妙編、『仏書解説大辞典』、13巻＋別巻＋著者別書名目録、東京：大東出版社 1965～1988年。
- 鎌田茂雄・他編、『大藏経全解説大辞典』、東京：雄山閣出版 1999年。
- 木内堯大、「最澄の法相宗観—守護国界章をめぐる—」、大正大学大学院研究論集26、2002年3月、122—123頁。
- 木内堯大、「『守護国界章』と『法華秀句』における文献引用態度の相違」、大正大学大学院研究論集33、2009年3月、67—77頁。
- 楠淳證、「日本唯識思想の研究—論議「第九識体」の検討—」、龍谷大学論叢443、1993年12月、150—186頁。
- 楠淳證、「愚草『一法中道』の研究—(前)—」、龍谷大学論叢448、1996年6月、49—101頁。
- 楠淳證、「法相の論議」、智山勸学会編、『論議の研究』、東京：青史出版 2000年、23—61頁。
- 楠淳證、「法相論議の形成と展開」、奈良女子大学古代学学術研究センター設立準備室編、『儀礼にみる日本の仏教』、京都：法蔵館 2001年、133—164頁。
- 楠淳證、「三祇成仏と一念成道—法相論議「撰在一刹那」による一大展開—」、『仏教文化と福祉』、京都：龍谷大学短期大学部 2001年、87—122頁。
- 楠淳證、「貞慶撰『唯識論尋思鈔別要』に見られる命終心思想の意義」、龍谷大学仏教文化研究所紀要44、2005年11月、3—35頁。
- 楠淳證、「日本唯識における縁起的生命観」、『仏教生命観の流れ：縁起と慈悲』、京都：法蔵館 2006年、103—127頁。
- 楠淳證、「日本唯識における行道観と臨終思想」、楠淳證編、『唯識：こころの仏教』、京都：自照社出版 2008年、58—83頁。
- 楠淳證、『心要鈔講読』、京都：永田文昌堂 2010年
- 楠淳證、「貞慶の菩薩種姓自覚の理論と仏道観—新資料『法相宗大意名目』ならびに『心要鈔』を中心として—」、龍谷大学論集479、2012年3月、48—85頁。
- 楠淳證、「南都の法会と法相論議」、マルティン・レップ/井上善幸編、『問答と論争の仏：宗教的コミュニケーションの射程』、龍谷大学仏教文化研究叢書27、京都：法蔵館 2012年、38—56頁。
- 結城令聞、『唯識學典籍志』、東京：大蔵出版 1962年。
- 河野貴美子、「平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承」、早稲田大学大学院文学

- 研究科紀要 第三分冊51、2006年2月、15—30頁。
- 新倉和文、「藏俊による天台一乗批判の展開—『法華玄贊文集』八十九の翻刻読解研究を中心に—」、南都仏教95、2010年12月、127—196頁。
- 末木文美士、『東域傳燈目錄』の諸問題、『高山寺本東域傳燈目錄』、高山寺資料叢書第十九冊、1999年、303—325頁。
- 東国大学校仏教文化研究所編、『韓国仏書解題辞典』、東京：国書刊行会 1982年。
- 富貴原章信、『(中世日本) 唯識仏教史』、東京：大東出版社 1975年。
- 永峰忠直、「新羅仏教における元暁の影響の一例—太賢撰『成唯識論学記』の記述を手がかりに—」、龍谷教学44、2009年3月、1—17頁。
- 蜷川祥美、「藏俊の『変旧抄』における真如観」、南都仏教69、1994年3月、1—56頁。
- 蜷川祥美、「藏俊の因明思想について」、印度学仏教学研究97、2000年12月、223—225頁。
- 蜷川祥美、「藏俊の『変旧抄』について」、『仏教文化と福祉』、京都：龍谷大学短期大学部 2001年、169—207頁。
- 蜷川祥美、「藏俊著『唯識論菩提院鈔』中の論議—「且就有身」と「境亦同此」について」、岐阜聖徳学園大学紀要(短期大学部)39、2007年 月、124—114頁。
- 蜷川祥美、「中世の南都仏教の特色—特に法相宗について」、岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要7、2007年 月、17—29頁。
- 蜷川祥美、「中世法相教学における「信」の解釈」、龍谷教学42、2007年3月、97—111頁。
- 蜷川祥美、「藏俊著『法華玄贊文集』八十六について」、岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要9、2009年 月、17—32頁。
- 蜷川祥美、『論第六卷尋思鈔別要』(写本龍谷大学蔵)中の「約入仏法」について、『人間・歴史・仏教の研究(中西智海先生喜寿記念文書)』、京都：永田文昌堂 2011年、383—402頁。
- 福士慈稔、「日本法相宗諸目録及び章疏にみられる新羅仏教認識」、宗教研究355、2008年3月、360—362頁。
- 藤本文雄、「藏俊の『唯量抄』における源信批判について」、天台學報31、1989年10月、95—100頁。
- 堀池春峰、「843注進法相宗章疏」、大日本仏教全書 第九十九卷・解題三、東京：鈴木学術財団 1973年、266—267頁。
- 牧田諦亮・落合俊典編、『中國・日本經典章疏目録』、七寺古逸經典研究叢書第六卷、東京：大東出版社 1998年。
- 龍谷大学仏教学会編、『(佐藤教授停年記念) 仏教文献の研究』、京都：百華苑 1968年。
- 龍谷大学仏教学会編、『(武邑教授・小島教授定年記念) 縁起の研究』、京都：百華苑

1985年。

龍谷大学仏教学会編、『(山崎教授定年記念) 唯識思想の研究』、京都：百華苑 1987年。

早稲田大学図書館編、『萩野三七彦旧蔵資料目録』、東京：早稲田大学図書館 1998年。